

優秀賞

中学生部門

攻玉社中学校2年

吉浦 輝

## 「祖父が教えてくれたこと」

今から三年ほど前、僕の祖父ががんで亡くなった。物心がついてから親戚が自分の周りからいなくなるのは初めてだったから、少しも実感が湧かなくて、涙が出ることもないと思っただ。それなのに、祖父が息を引き取った瞬間涙が出てきて、止まらなかった。大事な人ともう会えなくなるなどということへの悲しさによるものではなく、ただただ自然に涙があふれて、止まることがなかった。

結局、僕が目の前で起こったその出来事についての本当の意味を実感することは無かった。人間は「死」という言葉をまるでその意味を理解しているとしても言うように、軽い気持ちで使っているが、本当はその答えを知る人は誰一人としていないのではないか。動物が「死」というものを理解できないというのはすでによく知られている。例えば突然我が子を失った母ザルなどは、自分の子供に何が起こったのか分からず、ゆすったり叩いたりしながら数日間あてもなくさまよい続ける。人類と生物学的に最も近いサルさえこうなるのだから人間が「死」というものを理解できないのも無理はない。いや、理解できる、できないの問題ではなく、その存在自体が不思議で、捉え方によって様々な見方ができるのだろう。ただ一つ明らかなのは、「死」という終わりが存在し、その存在を認識できたから、人類はみずからの人生に価値を見出し、日々を全力で生きることができると思う。そう、永遠に時間は人を待ってはくれない。だからこの世界は素晴らしいと思う。それが人が生きる上で必要な、活力の最大の源だと思っている。

だからこそ僕は心に大きな不安を抱えている。人が「死」と無関係になる時が来るのではという不安だ。信じられないが、近年の科学の進歩を見るといつもそれが心に引っかかる。人が自らの究極の望みをかなえた時、僕達は「生きぬく力」を失う。